

● 前回の感想とおさらい

成田悠輔『22世紀の民主主義』は、選挙や民主主義の機能不全を指摘し、問題としていることは共有できるが、それに対して著者が提示する処方箋「無意識データ民主主義」は、「アルゴリズム」や「情報端末」に、人間性を明け渡すかのように賛成できなかった！

ただ、そうであったとしても「社会の仕組みや制度が機能不全に陥っている」という問題意識は、異論のないものであった。したがってこの問題は、私たちひとりひとりに課されている問題としてあると思った。

[社会契約の機能不全に対して]



● 社会契約は、社会を形づくる一方で、ものごとの判断や考え方を、法や国家に委譲してしまう契機にもなりうる(1)(2)。社会契約が形骸化するとき、それを学びなおすこととともに、そもそもの倫理の根にも立ち戻ってみたい(3)。

このとき、茨木のり子の詩には、自分で自分を律することができる(4)(5)、ということへの、とおりの一辺倒ではない洞察を読むことができるのではないかな。すなわち、雄々しくて、勇ましく高らかに謳い上げられる自律(=自立)的な人間だけではなく、受け身的で、ときに草臥れていて、ときに卑屈でさえあるような、人のままたまならなさへの眼差しとして。仮にこれを【弱さへの洞察】として、以下、二篇とりあげてみる。

【1】『寄りかからず』(p.244～p.245)について

自律(=自立)をうたっているが、ただし「椅子」の背もたれには「寄りかかる」。また、「寄りかかる」「依りかかる」ではなく「寄りかかる」。そして、否定形によって、「あえて」ということが強調されている。

【2】『青梅街道』(p.175～p.176)について

谷川俊太郎(1931-)は、冒頭 p.3～の「初々しさ」で「何でも言える親しいおつきあいをしていましたから、時折私は苦言を呈しました。例えば有名な「わたしが一番きれいだったとき」の第五、第六、最終節はないほうがいいとか、「寄りかからず」より「青梅街道」のほうが好きだとか、茨木さんは不満顔ながら素直に聞いてくれました。」(p.3)と寄せている。

冒頭から、卑俗な、資本主義的世界の縮図(「刻を争い血走りして」)をみるような、「ハンドル握る者」への軽蔑をすら感じさせる描写が続くが、「さつきついたち鯉のぼり」で、やや視線が上向くあたりから、変わっていき、「さればこそ / 今を生きて脈うつ者 / 不意にいとoshi 声たてて」と、向けられた眼差しに慈しみが宿る。

● 今回のまとめ

逆説的だけでも、自律 (=自立)は、弱さへの深い洞察によってこそ裏打ちされる、ということがあるのではないか。スピノザでは、「賢者」とあるので気おくれもするが、(國分功一郎『スピノザ 読む人の肖像』p.325)、しかし賢者を賢者とするのは、その意識のあり方だった。すなわち、意識のあり方で、賢者(的)でありうる。『青梅街道』に、「意識の弁証法」を見い出すことができるのではないか、試みに実験してみる。

【弱さへの洞察】

ルネサンス的???

- ① 私たちは「刻を争い血走りしてハンドル握る」(受動性=弱さ=第一種認識)。
- ② しかし俯瞰すれば(因果関係についての知=第二種認識)「かつて幕末に生きし者」もそうであった。
- ③ なるほど、とはいえ、それぞれ時代の制約を受苦しながらも、そのおのおのが「今を生きて」いたのだ。(①と②が循環する=第三種認識)〈能動性(への契機)〉

仮にここで、弱さへの洞察に対し【強い思想】というのを仮定してみるとどうか。

【強い思想】

啓蒙主義的???

- ① 私たちは「刻を争い血走りしてハンドル握る者=資本主義の走狗」にはならない。
- ② あるいは、資本主義の走狗となるのは、馬鹿(人は獣になる)だからだ。
- ③ 馬鹿を啓蒙、啓発しなければならない、そうでなければ「法、規制」を拵え遵守しなければならない。
あるいは、馬鹿に期待するのはやめて、柵で囲って飼いならしてしまおう。

どうしても、自律(=自立)というと、何に拠らず、自らを力強く打ち立てるという姿が浮かぶ。けれど、弱さをともなってこそその自律(=自立)ということはないだろうか。茨木のり子の詩を読むと、そのような弱い私のなかの小さな倫理の萌芽のようなものを感じる。谷川俊太郎は、茨木のり子の詩について、「〈私〉を含みこむことで、〈公〉がより深く大きくなった」と評するが、「公」が「私」物化される現代において、むしろ「私」のなかに生まれる「公」をみてもよいのではないか。弱さをみる、という強さ(=しんどさ『悪童たち』p.47)。ゆえに、その小さな倫理の萌芽のために、私たちは『準備する』(p.35)。

[前回までの【おまけ】であげていたものを参考]

(1) レベッカ・ソルニット(1961~)『災害ユートピア—なぜそのとき特別な共同体が立ち上がるのか』

2011年2月6日(金) 朝日新聞書評 柄谷行人

(2) ハンナ・アーレント(1906-1975)『エルサレムのアイヒマン - 悪の陳腐さについて - 』

(3) 古田徹也(1979-)『それは私がしたことなのか 行為の哲学入門』新曜社

(4) 夏目漱石(1867-1916)『模倣と独立』(1913)

(5) 斎藤幸平(1987-)『ゼロからの「資本論」』NHK出版新書

【 今回のおまけ 】 國分功一郎とブレイディみかこによる対談で(『文学界』2023年3月号 國分功一郎×ブレイディみかこ「<沈みゆく世界>から立ち上がる」) 自律とアナキズムを結びつけていて興味深い。

p.208

國分 ブレイディさんは、自分がもっとも共感できる思想をひとことというアナキズムかもしれないと、ずっとおっしゃっていますよね。アナキズムって何なんですかと言われると説明が難しいところがあります。イメージで語られやすいし、社会のなかでなかなかマジョリティにはならないので、姿がはっきりしないんですよね。

でも、いま「自律」とおっしゃったように、上からの抑圧をもとに秩序を作っていくんじゃない、ということがアナキズムの基本にあると思うんです。ホッブズだったら、まさしく上から抑えつけて秩序を作る。それに対し、抑圧や禁止に基づくんじゃなくて、人々が協力して生きていくことで社会を作るとというのが、アナキズムの発想の根本でしょう。だから抑圧に対する反発心が根幹にある。スピノザにはその点でアナキズムに近いところがあります。抑圧に基づいて秩序を作るという考え方にどうしたら対抗できるかというのはスピノザの問いでもある。

哲学史を紐解いていくと、上から押し付けて秩序を作っていくという発想のほうがメジャーです。でも全然違うことを考えてきた人たちの流れもポツポツとある。スピノザもこのメジャー路線から外れた側にいる人です。そもそも長い間スピノザは哲学史の裏街道にいた人で、そのことは、社会的な抑圧を前提に秩序を作ることを拒否するアナキズムが常にマイナーな側面を持っていたことに似ていますね。

ブレイディさんが『ワイルドサイドをほつつき歩け』で書かれていたような、政治にもあまりにも見放されたから自治が盛んになってきたという状況はまさしくアナキズム的ではないでしょうか。

「獣の道」への違和

スピノザはヤン・デ・ウィットの事件(1672年、災厄の年)が起きたあとで、犯行現場に「汝ら野蛮きわまる者ども」と書いた抗議文を貼り付けようとした、という逸話が残っているという。なるほど、ヤン・デ・バーンの『デ・ウィット兄弟の亡骸』をみるに、これは人の仕業というより獣の如き所業である。どうみてもやりすぎだ。しかし、一抹の疑念がよぎる。獣でもこのようなことはしないのではないか。ライオンは満腹のときには、狩猟をしないというではないか。無論「獣の道」というのはあくまで比喻としてもものではある。とはいえ、このような所業は「獣」に由来するというより、むしろ「人」のなす業ではないか。

「獣の道」に陥らないように、「社会契約」を拵える必要があるというが、そうではなく「社会契約」こそが、獣の業をもたらす、ということはないだろうか。じつはホッブズの『リヴァイアサン』にいう、「リヴァイアサン」は、旧約聖書に描かれる海の怪獣だという。すなわち、「獣」である。「獣には、獣を。」ということなのだろうか。スピノザが「汝ら野蛮きわまる者ども」といったときの野蛮さは、「王を求める民衆」によって引き起こされたものだ。旧弊の王を抹殺し、新たな「社会契約」にすげかえること。つまり、この虐殺は、「社会契約」を求めるがゆえに引き起こされたのだとはいえないか。人はみずから隷従するにふさわしい王を求めて「獣」になるのだ。

さて、旧約聖書の「リヴァイアサン」をあたってみると、それはヨブ記に登場している。ヨブは神と悪魔のもとでさまざまな試練を与えられ、運命を翻弄され、それでも信仰を続けることができるか、と試される。あまりに過酷な運命のなかで、ヨブは自分が生まれなければよかった、とみずからの出生をさえ呪いはじめる。「ヨブロを啓きて自己の日を詛へりヨブすなわち言詛を出して云く我が生れし日亡びうせよ、男子胎にやどれりと言し夜も亦然あれ」(ヨブ記 第三章) 怪獣「レビヤタン」はこの「自分が生まれなければ」というときに、登場するのだ。このときのヨブの心持ちを推し量れば、「期待しなければ、失望もしない」というものだったといえるだろう。ホッブズがなぜ、国家を「リヴァイアサン」になぞらえたか、はあたれていないが、しかし、ここから発想される「社会契約」はなんとも寒々しい。

信仰を試され、裏切られ、深く傷ついたヨブの身になってみれば、それも致し方ない心情だ。しかし、ゆえに、なおも期待せずにはおられないこと、それが賭せられているのではないだろうか。